

書評

包偉民氏
『宋代城市研究』

穴沢 彰子

唐宋時代はそれ以前と比較して中国の政治、社会、経済、文化が大きく発展した中国史の転換点とされる所謂「唐宋変革期」と認識される。唐宋時代の都市の認識においては、唐宋間における経済の発展を背景に、唐代の城壁・坊牆で圍繞された閉鎖的な都市から宋代の坊牆のない開放的な都市への空間的变化、そして商業区域や商人が制限された唐代の「市制」から、規制が緩やかで自由な経済活動が許容される宋代の市場への変化、商業の発達による市民階層の勃興と庶民文化の発達といういわば西欧ルネサンス期にも比せられるコンテキストで語られる。このコンテキストは日中の歴史学界において「自明の理」となっているといても過言ではない。

このような唐宋史学界の予定調和的な認識に対して、本書は宋代経済史、江南地域史の大家である北京大学教授包偉民氏が唐宋都市の規模や類型、行政・市場制度や税制、都市のインフラ整備、人口や都市文化などの分野についての詳細な考察から、先学の功績を認めつつもこれまでの唐宋時代の歴史学研究に真っ向から挑戦し、新たな論点を提出された意欲的な著作である。

本書の構成は以下の通りである。

- 緒論 唐宋城市研究学術史批判
- 第一章 城市的規模、類型与其特征
- 第二章 管理制度
- 第三章 城市市場
- 第四章 城市税制
- 第五章 市政建設
- 第六章 人口意象
- 第七章 城市文化
- 第八章 發展瓶頸
- 結語

本書は論点が多岐にわたり、考察も膨大な量となり、全ての内容を紹介することは却って書評の内容を薄くしてしまう恐れがある。今回は紙幅の関係もあり、総論「唐宋城市研究学術史批判」で、近年めざましい学術的発展を遂げ、成熟した学問的領域へと成長した唐宋時代都市研究に対して包氏が加えられた研究史的批判と唐宋時代都市史への新たな提言について幾つか論点を絞って

紹介し、第一章以下の各論を絡ませながら以下紹介する。

はじめに、包氏が整理された唐宋都市研究史の流れを紹介しておく、唐宋時代都市研究の草創期として1920～30年代の研究をあげられ、特に加藤繁氏¹⁾について都市の市場、郷村の草市、商業組織など多方面にわたる研究の開拓者として高く評価される。そして50～60年代中葉を唐宋時代都市研究の発展段階としてとらえられ、斯波義信氏の都市を商業から分析する見方や都市の市場を個体と群体の双方から分析する方法、梁庚堯氏²⁾の宋代の都市と農村の分離問題などについて代表的研究としてあげられ、各々の領域の発展と深化の時代とされている。そして80年代以降の特徴として以下を挙げられる。議論の対象が首都などの中心都市から一般州郡都市、農村部の草市鎮に広がったこと、一都市そのものだけではなく都市の複合体としてとらえるようになったこと、考古学的発見が研究の発展に大きく貢献したこと、都市のシステムと空間分布の変化、交通、都市生活、都市人口や住民構成、都市の地域的構造、都市環境にまで関心が及び、研究テーマが細分化されたとする。

このように膨大な数の研究を整理された上で、唐宋都市研究のある種の限界と矛盾を提示される。すなわち包氏はこの半世紀の間唐宋時代の歴史研究において主旋律であった「発展モデル」は、唐宋時代における「都市発展」に対して論拠を与えたが、同時に単一の学問的思考経路は研究の進歩に対して各種の制限を加えたとし、唐宋時代都市史における「発展史観」について再検討の必要を提言される。そしてこの「発展史観」の背景として、史学研究が社会思想や社会状況による影響と制約を受けざるを得ないということを包氏は指摘される。

すなわち第二次世界大戦後の西欧社会の「停滞する中国文明」に対する認識への反省から、中国社会にも不断の進歩があったことを強調する動向が学界では支配的であり、その流れの中で唐宋時代は政治・経済・文化の各方面で顕著な発展時期であると無批判に位置付けられる傾向があったと断じられる。すなわちジャック・ジェルネ氏の研究³⁾を例として挙げられ、宋代都市と商業活動の研究から、中国文明は静止的ではなく、固有の発展形態をもっていたことを強調する目的があったとされる。斯波義信氏も宋代の「商業的繁栄」、「商品、貨幣経済の発展」は「周知の事実」と認識され⁴⁾、マーク・エルヴィン氏⁵⁾やその説を引用したスキナー氏⁶⁾、中国人研究者では漆俠氏⁷⁾が宋代都市経済の顕著な発展を「経済革命」、「都市革命」として表現している。また90年代に至っても内藤湖南らの「唐宋変革期」説は唐宋時代における都市発展という仮説に対して最も有力な論拠であり、現在に至るまで影響力を及ぼしていると断じられる。

このような研究動向に対し包氏は、内藤湖南の「唐宋変革期」の理論は本来文化史上に対するものであるにも

かかわらず、理論を拡大してあらゆる史実に当てはめていく傾向があると指摘される。スキナー氏の研究もまた本来の目的は唐宋時期そのものの分析ではなく、清代末期の都市についての討論の補強に過ぎず、エルヴィン氏の宋代に経済水準が最高レベルに達したという「高水準均衡説」、*「都市革命」*に対しても日本の研究者が再構成した唐宋時代の都市発展という認識をよりどころとしたものに他ならないと批判を加えられる。

このようにある種の予定調和的に論述される唐宋都市史に対して、包氏は本書の各論において史料や統計を博捜し、古代から宋代にかけての都市の様々な分野における実態を解明することによって、実証的反論を試みられる。以下各章における包氏の唐宋時代の都市の実態についての代表的な論証を紹介する。

第一章「城市的規模、類型と其特征」では中国古代都市が政治的、軍事的拠点と商業市場としての両面性をもって発展したと論じられ、都市の分布状態や規模、戸口数、城壁、街区の配置などから詳細な検討を加えられた。その結果、確かに唐宋時代の経済的繁栄によって、都市の実際の地位がより上級の行政都市を凌駕する現象もみられ、中国伝統社会の都市発展史の中でも意義ある現象といえるが、しかしながらそれは農村の鎮市やごく少数の低級都市のケースであり、基本的には両宋時代、都市の経済的發展水準とその行政的地位は基本的には整合し、行政的地位は都市経済の繁栄にとって重要なファクターであり、宋代の都市もまた古代以来の軍事・行政拠点としての都市という歴史的流れの中に存在するとされた。この都市の地位は当時の士大夫の都市人口イメージにも影響を与え、第六章「人口意象」において、当時の文人士大夫のイメージ上の都市規模の認識を検討するというユニークな試みを行われた。行政都市等級が同一レベルの都市間においても実際は人口差が大きいが、両宋期の士大夫のイメージでは同じ人口レベルとして認識され、都市発展の客観的現実が人々の心象の中に反映していたとされる。

また宋代都市の発展指標とされる人口が城壁外に「溢出」する現象や城壁の拡大も、実際には城壁内には都市化されない区画が相当量存在し、人口「溢出」は城門近辺の商業地など地域的に限定された現象にすぎず、城壁の拡大は防衛上の理由や城内外の区別を明確化するという行政的目的にもあったとされ、宋代の経済発展を理由として都市の商業的役割を一方的に強調することや、都市化の拡大を強調することに警鐘を鳴らしておられる。

包氏はまた唐宋時代の都市の転換において最重要命題とされてきた「坊制と市制の崩壊」についても、第二章「管理制度」、第三章「城市市場」において、多くの史料を渉猟されて再検討を試みられている。宋代都市の行政区画である坊・廂・界・隅等の実態について解明され、

とりわけ宋代までに崩壊したとされる坊について、坊を圍繞する坊郭は都市景観から消失したものの、北宋開封府では制度として基層の坊制が維持され、職役である坊正が存在していること、坊名の額が掲げられた坊門が都市の一景観として認識されていたこと等をあげられ、唐代の坊制が宋代にも様々な形態に変化しながら存在していたことを明らかにされている。

「宋代の市制の開放性」についても、実際は唐代から宋代への市場の変化はこれまで論じられていたほど激的な変化はなく、宋代の市場は唐代の痕跡を色濃く残していると論じる。すなわち唐代の「市」は卸売専門の市場であり、一般の小売りは各々の坊内の商店においても営業されていたこと、確かに宋代の市場は境を区切った閉鎖的で排他的な商業区域ではなく、商人は任意に店舗を設立可能なものの、実態においては、商店は伝統的市場区域に集中し、州郡都市の市場についても、都市の城内もしくは城外に存在し、区画状もしくは十字街を呈する形態を持つことを明らかにされた。一方では宋代において新たに広義の市場概念が誕生し、すなわち城牆などの基準物による州郡城全体として認識され、そして「市戸」とは唐代に「市籍」に付けられて管理された商人と異なり、宋代では郷村の人戸と相対する都市住民として認識されたことを解明された。

そしてこのような新たな都市住民、都市居住形態の誕生は税制にも変化を及ぼしたことを明らかにされた。第四章「城市税制」では唐宋時代の都市の発展により、農村と都市との土地価格、経済格差という社会の実態を反映させる税制が確立したことを実証され、すなわち、都市の税制については、農村の両税というべき屋宅地など不動産を税の基準とした唐代の旧制を継承する屋税の他に、新たに坊郭戸（都市居住戸）の所有財産を総合評価する算定基準や、商業経営の複雑化に対応させ土地、建物、営業の三者を分離した税制も設けられたとされる。このように唐代の旧制を受け継ぎつつ、新たに経済実態に合わせて税制を調整したため、宋王朝の税収収取能力は突出し、その歴史的な活力を体現していると評価される。

以上のように唐宋期の「転換」、「発展」のみを強調することに對して疑問を投げかけ、反証されたのと同時に、本書は中国近代史に対する欧米の研究動向の影響について、両者を調和させることの困難さを挙げ、唐宋都市研究における学術概念のもつれが生じているとして警告される。

一例をあげれば「市民」概念はもともと「自由」と「自治」を基本理念とする近代自由主義の文化類型であり、所謂ルネサンス期の市民階層やフランス革命期の第三身分で形成された「市民」を指す。従って徒に西洋の概念を中国に應用すると、その歴史的背景と元々の意味

を分離させ、学術的な議論に耐えられなくなると論じられる。この矛盾の回避の為に、中国、西洋との間の史実の差異を明確にした上で、西欧市民社会と中国伝統市民文化が各々内包しているものの中から比較可能な対象物を選択する方法を提言される。

上記の議論を踏まえて、第七章の「城市文化」においては宋代の文化的特徴として論じられてきた「市民」の勃興、「市民」文化の発達という認識に対し一石を投げられた。確かに市井の世俗文化の勃興は宋代都市の新局面であるが、経済領域ほど顕著な発展を見せず、伝統の継承が主流であり、都市と農村との文化的差異や士大夫の清雅の文化の地位は強化され、唐宋間に特別な転換は無かったと論じられる。そして唐宋間の都市文化の発展の意義はむしろ主に政治的領域にあり、唐代以来の士大夫階層の都市居住、文化の都市集中が継続、強化されたことで、専制国家に文化面における未曾有の制御権を帯びさせる一例として科举制度が国家に文化上専断可能な地位を与える一ことになったとされる。こうして南宋時期からこの伝統文化の中心は郷村から都市へと徐々に轉移したと結論づけられた。上記の議論によって文化領域が政治の影響を強く受けた宋代社会に対して、西欧社会の「自由」、「自治」を基本理念とする「市民」概念を無批判に当てはめることの不適格性を示される。

それでは唐宋時代都市研究をどのように切り開いていけばよいのか。包氏は以下のように提唱される。まず一つには都市化の速度と過程について、都市化を促す動力とそれを制約する要素から見るべきであると提唱される。例えば大都市の発展を支える要素である交通状況、衛生体制、物資の供給体制、加えて宋代の巨大な人口を抱える都市を支える食糧問題について説明にすることにより、史実を再構成するときの思考手段、「発展モデル」への再検討に対する有効な視角となり得るとされる。本書では第五章「市政建設」において近年発掘された考古学的資料も駆使して、巧みに市区を配置したこと、瓦磚を使用した建築、道路が高度なレベルに発達し、宋代都市の発展を支えたこと、そしてその反面、第八章「都市瓶頸」において、一定区域に人口が高度に集中し、資源を消費することによって都市発展を阻害する要因である所謂「都市病」についても分析を加えられている。

またこれまでの唐宋時代都市研究の中心は史料的制約などから都市等級が最高の首都研究の影響が強く、地域都市研究は一定の成功をみているものの、中小都市に首都や大都市の現象を敷衍して解釈する傾向があるなど、依然として蓄積が浅いと包氏は指摘される。このような状況に対して各地域で異なるタイプの都市を類型化できれば個別研究が展開可能であり、これらの個別研究の基礎の上に、実証的に帰納すれば、唐宋都市の全体的な認識に対してレベルアップが可能であると提言されている。

実際に本章第一章では五大地域ごと（華北、関中河東、東南、川蜀、嶺南）、等級ごと（首都、地域中心都市、路治都市、一般州軍都市）に分類して分析する方法を採られている。

以上、包氏の唐宋都市史への学術的批判と提言を各論と絡ませながら本書の内容を紹介した。以下本書の注目すべき点と疑問点について挙げてみたい。

第一に包氏はやみくもに唐宋間の経済発展による都市の発展について、唐宋間の差異を発展として強調して単純に概念化、図式化することなく、唐代までの伝統や制度を継承した部分と新たに唐宋間で変化した部分を冷静に見極めて区別し、却って宋王朝や宋代社会の柔軟性や時代性を豊かに描き出しておられる。そしてその背景には、包氏のあくまで史料から帰納することによって得られた史実に対して謙虚な態度があり、様々な見方から史実を突き詰めようとする不断の努力がある。さすがに「世界史の基本法則」のような単線の発展段階論に依拠することのなくなった現在でも、それに代わる新たな欧米中心の理論を無批判に受け入れてしまう傾向のある我々に対して厳しい警告を発しておられる。

第二に唐宋都市史を分析する方法として、歴史をさかのぼって比較分析する必要性を述べられ、仰韶文化の時代から宋代に至るまでの中国史の中での、軍事・行政・商業のそれぞれの拠点としての都市の構造、空間配置、地域差等の変化を詳細に考察されたこと、その積み重ねの上に、経済的役割を一方的に強調することなく、軍事・行政的拠点と商業拠点という両輪の輪のごとく相互補完する都市として宋代都市を、古代からの中国伝統都市という長いスパン間の中に位置づけをなされたことである。

第三に史料的な限界に挑戦し、新たな史料解釈方法や絵画資料、考古学的資料によって唐宋都市史を意欲的に解明されていることがあげられる。史料の少ない一般州郡地方都市にも視野を広げて考察の対象とされたことは、首都や地域中心都市に偏りがちな宋代都市研究にとって研究の厚みをもたらすことになった。

いくつかの疑問点も挙げておきたい。

本書において宋代都市への考察対象がいわば外枠ともいべき都市構造や制度に重点が置かれているため、都市の重要な構成要素である住民については、制度や都市構造の中での人間といういわば静態的な記述になってしまうことは避けられない。しかし宋代の都市には上は官僚から下は一般民衆、細民・アウトローまで生活し、多様性と流動性をもった世界を形成していた。上記のような都市住民の動向や相互の関係について、氏が考察された宋代都市の構造や行政制度と双方どのようなかわりを持ち、影響を及ぼしたのかについて動態的に考察する必要もあると考えられる。また包氏は、城壁が行政的に都市と郷村を明確化する存在であり、城郭内の都市住民

(=「市民」)であるという認識が生じたとされる。一方では宋代の民衆の中には、郷村から城内またはその逆を通過して商業や生産活動に従事するライフスタイルを持っていた人も多く、都市に隣接した地域と連携を保つ一帯を都市域と考えて「城域都市」として分析する必要があるとの見方もある⁸⁾。都市と郷村地域をも含めた全体を連続面としてとらえ、地域全体と都市との関わりや人々の意識の問題についても注意を向ける必要があると思われる。

いまひとつには宋代の都市発展を以後の歴史の流れの中でどのような位置付けるのかである。包氏の唐宋都市に対する研究について「唐宋変革」を相対化する意識から、古代にさかのぼって比較、考察を加えられているが、後世、「唐宋変革期」と同様、商品経済が発展し、郷紳が勢力を伸ばし、都市集中が更に進む社会経済の変動の顕著な時期とされる南宋から元初、もしくは明末清初を中国史の転換点とすれば、宋代の都市がどのような歴史的位置づけをもち、変化し、もしくは後代に継承されていくのかについての展望も加えるべきではなかろうか。

以上、疑問も幾つか挙げたが、これにより本書の価値を損なうことはいささかもない。本書が宋代都市研究を志す者にとって必ず熟読すべき一冊であることは言を俟たない。

注

1. 加藤繁「宋代都市の発展」『支那経済史考証』上巻, 東洋文庫, 1952年。
2. 梁庚堯「南宋城市的発展」『宋代社会経済史論集』上巻, 充辰文化実業股份有限公司, 1997年。
3. ジャック・ジェルネ『中国近世の百万都市—モンゴル襲来前夜の杭州』平凡社, 1990年。
4. 斯波義信『宋代商業史研究』風間書房, 1968年。
5. Mark Elvin (マーク・エルヴィン) *The pattern of the Chinese Past*, Stanford University Press, 1973
6. G. ウィリアム・スキナー (今井清一 訳)『中国王朝末期の都市—都市と地方組織の階層構造』晃洋書房, 1989年。
7. 漆侠「宋代社会生产力的发展及在中国古代经济发展过程中所处的地位」『中国经济史研究』1986年第1期, 1986年。
8. 伊原弘・梅村坦「花開く都市社会」『世界の歴史7 宋と中央ユーラシア』中央公論社, 1997年。